



『ともに喜び、ともに泣く者!』(要旨)

ローマ 12・13-15 説教者 原田憲夫

今週の聖句 ローマ 12・15

*賛美 [説教前] 教会福音讃美歌 391 番(1,3 節), [説教後] 同 447 番(1-3 節)

今朝は先週に続き、使徒パウロがローマ 12 章から語る「愛」-十字架に現れた神の愛-の実践への勧め-13~15 節-にしっかり心の耳を傾けたいと思います。

【1】聖徒たちの必要をともに満たし… (13)

(1) 「必要をともに満たし」・・・

ペンテコステ直後にエルサレムに誕生した初期キリスト教会が、「互いの必要」を分かち合っていた姿を思い起こします。不足、欠乏を味わっていた過酷な時代でしたが、不思議なほど主の愛が溢れる時代でした。

(2) 「努めて人をもてなさない」

4世紀の教会指導者クリュソストモスは、「もてなし」を受ける側の肩身の狭さを感じさせないように、「もてなしを決して上から下へ施すものとせず、言葉と行為とで当然のこととして表すように」と教えました。→マタイ 25:35-36。

不思議です。私たちが主イエスに倣い、「旅人への愛の配慮」を自然に示す時、結果的に、もてなす側の「いやし」「祝福」となるのです(ヘブル 13:2、1ペテロ 4:9)。

*実例トス 3:12-14 →小さな「もてなしの実践と連携」が多くの実を結びました。

【2】迫害する者を祝福しなさい… (14)

人の自然の感情に従えば、「迫害する者」は倒すべき「敵」です。「愛」の対象外です。

ところが主イエスは、「自分の敵を愛し、自分を迫害する者のために祈れ」と命じられます(マタイ 5:44)。

しかも主イエスは教えを説いただけでなく、それを身をもって示されたのです。ご自分を十字架にかけて苦しみ、殺そうとする「敵」を愛し、救うために十字架の道を歩まれます。そして十字架の上でこう祈られました。

「父よ(神様)、彼らをお赦しください。彼らは、自分が何をしているのかが分っていないのです。」(ルカ 23:34)。

そうです。私たちが十字架に示された神の愛-あわれみを心から信じ、そのあわれみを体験する時、「自分の敵を愛し、迫害する者のために

祝福を祈る」者へと変えられるのです(ルカ 6:36)。

【3】ともに喜び、ともに泣く… (15)

私たちは様々な場面で涙を流します。とりわけ、地上の別れ、死は悲しみの極みです。

主イエスもラザロの死を悲しみ、涙を流されました(ヨハネ 11:35)。

と同時に、主イエスはマルタたちに希望を語り、「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。」(ヨハネ 11:25)

そうです。希望のあるところに喜びは生まれます。主イエスを信じる者たちは、希望の神(ローマ 15:13)を父と呼ぶ「神の家族」として、いかなるときも「ともに涙を流し、ともに喜ぶ」ことができるのです。

【勧め】

今なお厳しく不安定な日々が続き、主にある者もまた幾多の試練を経験します。

けれども、さらに過酷な時代を歩んだ初期の主イエスにある方々が十字架の愛を実践したこと-聖徒たちをもてなし、また、迫害する者のために祝福を祈り、いつでも「ともに喜び、ともに悲しむ神の家族」として成長していった「歴史的証し」を-しっかり心に刻みましょう。

そして、ご聖霊の助けにより、《十字架に現れた神の愛》をしっかりと心に抱き直し、主イエスの心に倣い、「ともに喜び、ともに泣く者として歩ませていただくこうではありませんか!

(祈り)

(賛美)

